

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25245026

研究課題名(和文) 経済と安全保障の交錯

研究課題名(英文) The Economy-Security Nexus

研究代表者

飯田 敬輔 (Iida, Keisuke)

東京大学・法学(政治学)研究科(研究院)・教授

研究者番号：00316895

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 30,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「経済と安全保障の交錯」と題し、なぜ東アジアには、高度の経済的相互依存と安全保障上のリスクが同時に存在するのであろうかという問いに対して、理論的かつ歴史的な解明を試みるプロジェクトであった。研究の成果は膨大なものであり、簡潔に要約することは難しいが、あえて単純化していえば、近年に関していえば、やはり安全保障上のリスクが確実に同地域の経済的相互依存に影響を与えていることがわかった。

研究成果の概要(英文)：This research project, entitled “The Economy-Security Nexus”, was conducted with the aim of clarifying why high economic interdependence and high security risks coexist in East Asia from theoretical and historical perspectives. The results of the research are numerous and hard to summarize in a short space, but to put it succinctly, security risks are certainly affecting economic interdependence in the region in recent years.

研究分野：国際政治経済論

キーワード：安全保障 国際経済 東アジア

1. 研究開始当初の背景

本研究が開始されたのは、2013年4月であるが、構想されたのは、それにさかのぼる2012年秋のことである。当時は、日本政府が尖閣諸島を国有化したのに対し、中国がそれに反発をしていた。その後、中国の船舶が、尖閣諸島接続海域に頻繁に侵入するようにもなり、一触即発の状態にあった。しかし同時に2012年、日本からの対中直接投資は過去最高を記録していた。これは一例であるが東アジア地域では、高度の経済的相互依存が存在しているが、それにもかかわらず、安全保障上のきわめて高いリスクも存在する。これが本研究の着想の発端であった。なぜこの2つの現象が同時に可能なのであろうか。これは国際関係理論にとっては一つのパズルである。なぜならば、安全保障上のリスクの高いところでは、経済的相互依存は低い水準にとどまるはずであるというのはリアリズムの理論の予測するところであり、逆に、経済的相互依存が高ければ、国家間の友好が促進され、安全保障上のリスクは低減するはずであるというのがリベラル理論の予測するところだからである。

2. 研究の目的

上記のように、本研究の目的は東アジアにおいてなぜ高度の経済的相互依存と、深刻な安全保障上のリスクが同時に存在するのかという問いに、理論的かつ歴史的な答えを出すことを目的としていた。その方法については下記に記す。

3. 研究の方法

(1) 理論的方法

理論的には、まず既存の理論では、安全保障上のリスクと、経済相互依存の間の関係について何が通説となっているかを確認する必要がある。この問題について集中的に手分けして文献の読み込みを行った。これにより、戦争と経済相互依存との関係についてはかなりの量の先行研究がある一方で、もう少し低いレベルの安全保障上の緊張関係と経済相互依存の間の関係については、まださほど研究の蓄積がないことがわかった。したがって、その面でも本研究の貢献は大きいものとなりうるとの確信を得た。

(2) 計量的方法

もう1つの接近方法は計量的方法である。特に経済的相互依存については、さまざまな指標が考えられるうえ、どれを見るかにより、本研究の問いに対する答えも変わってくることになる。試行錯誤の上、東アジアの相互依存を見る上では、貿易結合度指数(Trade intensity index)と、それを直接投資および旅客数に応用した指数が適当であるという結論に達した。そして、これと、MIDSデータにより計測された東アジア地域における安全保障上の紛争(武力を伴うものと伴わないものの両者がふくまれる)との相互の関係

をパネルデータにして解析した。

(3) 歴史的方法

歴史的方法としては、過去の東アジア地域国際システムのなかでどの程度経済的相互依存および安全保障上の問題が存在したかを調べるのが本来の方法であるが、それには相当量のデータおよび文献の渉猟が必要となる。したがって、その代替として、これらについて、過去の思想家がどのようにとらえていたか、その理論を分析するという手法をとった。

4. 研究成果

(1) 理論的研究の成果

残念ながら、理論的研究の成果としては、まとまった成果が公刊はされていない。しかし、研究代表者が2017年刊行を目指している英文の研究叢書の理論編では、以下のような仮説が提示される予定である。まず、リアリズムとリベラリズムの対比では、やはり圧倒的にリアリスト的な効果大きい。つまり、安全保障上のリスクは外生要因である。あるいは国際政治のアナーキー的特徴から、必然に生み出されるといってもよい。そして、経済相互依存はその影響を受ける。しかし、上記のリアリスト的ベクトルに逆行する要素も存在する。1つは、国家による意図的な相互依存の操作である。たとえば、これまで敵視していた国との友好を築くため、あえて、その国との相互依存を高めるという政策がとられることがある。例えば、日中国交回復後の対中ODAの供与などはその一例である。2つめは、市場メカニズムである。市場アクターは価格のシグナルに敏感に反応する。したがって、国家がどのような政策をとろうとも、価格につられて、市場はそちらの方向に向かうことがある。3つめは距離である。いかにグローバル化の時代といえども、こと製造業に関する限り、運輸コストは経済的決定に大きな影響を与える。日本、韓国、中国沿海部が海ををささんで近距離にあることは物品貿易上大きな影響を与える。他方、近距離であることは安全保障上負に働くことが多い。このように、リアリスト的論理、リベラル的論理(友好操作、市場メカニズム)、距離の3つの相互作用により、東アジアには複雑な国際関係が現出するのである。

(2) 計量的分析の成果

すでにふれたように、本研究では、東アジア(なお、米国も含む)の経済的相互依存を、貿易結合度指数を応用して、貿易、直接投資および人の流れの3つに対して計測した。この計測結果は、下記のHPにすべて公開されている。また安全保障リスクについては、MIDSのデータの東アジアのdyad(二カ国の組み合わせ)について抽出した。そして、パネルデータを組み立て、紛争から経済相互依存、逆に経済相互依存から紛争への因果関係を特定しようとしたが、一部には効果がみられるものの、全体としては頑健な結果は得ら

れなかった。したがって、この成果は論文の形では発表されていない。しかし、上記の貿易結合指数による相互依存の記述的データの推移からでも多くのことがわかる。例えば、絶対量における貿易や投資ははまだ高い水準にあるものの、日中、日米、米中のいずれの dyad についても、結合度は近年低下傾向にあることが認められた。

(3) 歴史的研究の結果

歴史的研究は、上記にも記載した通り、かなりの作業量を必要とし、一朝一夕に完結するものではない。しかし、本研究では、時期を限定し、かつその時代の国際思想に着目して研究範囲を限定したことにより、最もまとまった研究成果を出すことができた。この成果は『レヴァイアサン』の2016年春号として刊行された。例えば、研究分担者の平野は近年の中国の外交思想を概観した。中国の平和的台頭の思想は、中国の経済的台頭（それは経済相互依存を前提とする）は平和的に行われる（つまり、安全保障上リスクを増大させない）ことを示唆している。しかし、それは、時限的なものであり、いずれ他国を圧倒する中国の姿を予感させる。また研究分担者の苅部は戦後日本の国連中心主義の淵源について考察した。国連中心主義は、安全保障を国連にまかせ、日本は貿易立国（経済相互依存の国）として生き残りを図る戦略である。これについては当初から批判が強かったが、時代の背景からすれば、ごく自然だったこと、また外務省内ではもっと現実主義的な国連中心主義が存在したことなどを明らかにした。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計23件)

飯田敬輔、「主要国の国際秩序観と外交：比較のための手がかりとして」、『レヴァイアサン』査読有、No.58、2016年、pp.9-22.

飯田敬輔、「新興国との共存はAIIIBが試金石：G20時代の経済秩序とG7」、『外交』、査読無、Vol.36、2016年、pp.44-51.

藤原帰一、「日本外交と安倍政権：何が変わったのか」、『経済倶楽部講演録』、査読無、(805)、2016年、pp.94-139.

久保文明、「重層的な日米同盟が国際秩序と平和を守る」、『潮』、査読無、1月号、2016年、pp.54-58.

久保文明、「日米安全保障条約の権利と義務における非対称性の考察」、『アジア太平洋地域における海洋安全保障と日米同盟』、査読無、3月、2016年、pp.2-7.

Motoshi Suzuki, "Book review of Evelyn Goh, *The Struggle for Order: Hegemony, Hierarchy and Transition in Post-Cold War East Asia*," *Japanese Journal of Political Science*, 査読無、17(1), 2016年、pp.133-135.

DOI:

<http://dx.doi.org/10.1017/S1468109915000456>

平野聡、「中国の「平和的台頭」は国際協調的だったか」、『レヴァイアサン』、査読有、第58号、2016年、pp.68-89.

飯田敬輔、「序論 国際政治における合理的選択」、『国際政治』、査読有、No.181、2015年、pp.1-14.

Keisuke Iida, "Political Risks and Japanese Foreign Direct Investment In East Asia: A Case Study of 'China-Plus-One'," *Korean Journal of International Studies*, 査読有、Vol.13, No.2, 2015年、pp.383-410.

DOI: 10.114731/kjis.2015.08.13.2.383

藤原帰一、「生き残った罪」、『外交』、査読無、Vol.30、2015年、pp.130-135.

久保文明、「国益を見据えた妥協の効用 - 日米和解プロセスの示唆」、『外交』、査読無、Vol.33、2015年、pp.100-107.

Toshihiro Nakayama, "Strategic Patience in a Turbulent World: The Obama Doctrine and its Approach to the World," *Asia-Pacific Review*, 査読有、Vol.22 No.1, 2015年、pp.1-15.

DOI:10.1080/13439006.2015.1038888

鈴木基史、「レトリックの政策決定ゲーム」、『国際政治』、査読有、181号、2015年、pp.15-30.

平野聡、「一八四二年アヘン戦争」、『文芸春秋 Special 教養で勝つ・大世界史講義』、査読無、9(3)、2015年、pp.203-209.

平野聡、「新・脱亜論「内なる中国」と

闘え』、『文芸春秋 Special 昭和史大論争』、
査読無し、9(4) 2015年、pp.238 - 245.

苅部直、「大正・昭和の歴史学と平泉史
学』、『藝林』、査読無し、64巻、2015年、pp.82
- 92.

苅部直、「解釈改憲としてのデモクラシー
とポピュリズムへの警鐘 吉野作造の洞
察』、『中央公論』、査読無し、130巻、2015年、
pp.104 - 111.

藤原帰一、「日本の戦争』、『外交』、査読
無し、29巻、2015年、pp.128 - 133.

中山俊宏、「オバマの対中東政策 - 期待
から幻滅へ』、『国際政治』、査読有り、180号、
2015年、pp.126 - 135.

苅部直、「技術・美・政治 三木清と
中井正一』、『政治思想研究』、査読無し、14号、
2014年、pp.65 - 81.

②① 久保文明、「オバマ外交のヴィジョン -
あるいはオバマ外交にヴィジョンはある
か?』、『国際問題』、査読有り、No.630、2014
年、pp.1 - 4.

②② 藤原帰一、「西部の平和・宇宙の戦争』、
『外交』、査読無し、25巻、2014年、pp.144 -
149.

②③ 鈴木基史、「パワーシフトの動向と対応
- 過去、現在、未来』、『学術の動向』、査読
無し、1月号、2014年、pp.10 - 16.

[学会発表](計 20 件)

Keisuke Iida, Motoshi Suzuki,
“Analyzing International Developmental
Loan Markets with Rival Lenders,” the
annual convention of the International
Studies Association (国際学会), 2016年3
月16日~19日、Atlanta, USA.

高原明生、「中国政治と一帯一路構想』、
科学技術振興機構日中シンポジウム「現代の
シルクロード構想と中国の発展戦略』、2016
年2月22日、科学技術振興機構東京本部別
館(東京都千代田区)。

Akio Takahara, “A Japanese Perspective
on the Dynamics and Prospects of China’s
Silk Road Initiative,” Eurasia’s Silk
Road and Trilateral Prospects for
Cooperation, 2016年1月26日、Brussels,
Belgium.

中山俊宏、「オバマ外交の中のリバラン
ス』、国際安全保障学会、2015年12月6日、
慶應義塾大学(東京都港区)。

高原明生、「日本の安全保障と中国』、日
本国際政治学会 2015年度研究大会、2015年
10月31日、仙台国際センター(宮城県仙台
市)。

Akio Takahara, “The American Factor in
Japan-China Relations,” China-US
Relations in Global Perspective, 2015年
10月9日、Wellington, New Zealand.

Fumiaki Kubo, “The Politics,
Challenges and Risks of Intelligence
Sharing between Australia, Japan and the
U.S.,” US-Japan-Australia Trilateral
Dialogue Hosted by the Institute of
Regional Security, 2015年9月4日~6日、
Bowral, Australia.

Akio Takahara, “A More Slowly Rising
China: Will It Change Its External
Policies?,” The 9th International
Convention of Asia Scholars, 2015年7月
7日、Adelaide, Australia.

中山俊宏、「オバマ政権のリバランス政
策の検証』、アジア政経学会、2015年6月13
日、立教大学(東京都豊島区)。

高原明生、「中日関係回顧と展望』、北京
大学日本研究中心主催「戦後70年と中日関
係」討論会、2015年5月5日、北京、中国。

久保文明、「オバマ外交の評価と課題
2014年中間選挙から16年大統領選挙向け
て』、IIST(貿易研修センター)国際情勢シ
ンポジウム「現下の国際情勢と日本を考える』、
2014年12月11日、東海大学学友会館(霞が

関ビル)(東京都港区)。

Keisuke Iida, “Security and Economic Interdependence: The China-Plus-One Case,” Korean Association of International Studies(KAIS), 2014年12月5日、ソウル、韓国。

久保文明、「アメリカの行方」, 経済広報センター主催講演会「米国の行方～10年後の米国の姿を占う」, 2014年11月21日、経団連会館(東京都千代田区)。

Fumiaki Kubo, “The Challenges of Asymmetrical Alliance: Japan and the U.S.,” The University of Pennsylvania, Penn Program on Democracy, Citizenship and Constitutionalism Seminar, 2014年4月23日、Philadelphia, USA.

Fumiaki Kubo, The Dynamics of Asymmetric Alliance: The Case of the United States and Japan,” The Center for American Progress, Japan Study Group chaired by Glen Fukushima, 2014年4月8日、Washington DC, USA.

Keisuke Iida, “Conceptualizing the Relationship between Foreign Policy and Public Opinion : A View from Japan,” International Studies Association, 2014年3月26日～29日、トロント、カナダ。

鈴木基史、「政治学における合理的選択論」, 日本公共政策学会、2013年11月23日～24日、駒澤大学(東京都世田谷区)。

中山俊宏、「オバマ外交における内政要因の検証」, 日本国際政治学会、2013年10月25日～27日、朱鷺メッセ(新潟県新潟市)。

Akio Takahara, “What is to be Done?: Burning Questions of Our Asian Studies,” アジア政経学会、2013年6月16日、立教大学(東京都豊島区)。

Motoshi Suzuki, “Regulatory Global Governance and State Power: Japanese Experiences with Basel Capital

Requirements,” International Studies Association, 2013年4月3日～6日、サンフランシスコ、米国。

[図書](計11件)

蒔部直 他、放送大学教育振興会、『政治学へのいざない』, 2016年、283 pp. (pp.109-173.)

中山俊宏 他、岩波書店、『岩波講座現代4 グローバル化のなかの政治』, 2016年、288 pp. (pp.215-237.)

久保文明 他、日本経済新聞社、『戦後70年談話の論点』, 2015年、304 pp. (pp.119-122.)

平野聡 他、岩波書店、『岩波講座現代5 歴史のゆらぎと再編』, 2015年、288 pp. (pp.149-174.)

Tadashi Karube, Routledge, *Republicanism in Northwest Asia* (Jun-Hyeok Kwak and Leigh Jenco(eds.)), ” 2015年、200 pp. (pp.109-117.)

平野聡、筑摩書房、『「反日」中国の文明史』, 2014年、270pp.

蒔部直 他、岩波書店、『「この国のかたち」を考える』, 2014年、218 pp. (pp.1-4, 163-188.)

平野聡 他、東京大学出版会、『社会人のための現代中国講義』, 2014年、291 pp. (pp.30-57.)

中山俊宏、勁草書房、『介入するアメリカ』, 2014年、264 pp.

飯田敬輔、中央公論新社、『経済覇権のゆくえ』, 2013年、272 pp.

藤原帰一、集英社、『戦争の条件』, 2013年、200 pp.

[産業財産権]なし

[その他]

科研費を使用して開催した国際研究集会

「グローバル経済と世界秩序」, 2016年1月
30日、新宿NSビル(東京都新宿区)

[備考]

ホームページ

「経済と安全保障の交錯」(飯田敬輔研究代表
科学研究費助成事業) HP

平成27年4月公開

<http://www.kiida.j.u-tokyo.ac.jp/cn4/index.Kaken.html>

飯田敬輔研究室 HP

<http://www.kiida.j.u-tokyo.ac.jp/index.html>

以上

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯田 敬輔 (IIDA, Keisuke)
東京大学・大学院法学政治学研究科・教授
研究者番号: 00316895

(2) 研究分担者

藤原 帰一 (FUJIWARA, Kiichi)
東京大学・大学院法学政治学研究科・教授
研究者番号: 90173484

久保 文明 (KUBO, Fumiaki)
東京大学・大学院法学政治学研究科・教授
研究者番号: 0126046

高原 明生 (TAKAHARA, Akio)
東京大学・大学院法学政治学研究科・教授
研究者番号: 80240993

苅部 直 (KARUBE, Tadashi)
東京大学・大学院法学政治学研究科・教授
研究者番号: 00261941

平野 聡 (HIRANO, Satoshi)
東京大学・大学院法学政治学研究科・教授
研究者番号: 00361460

鈴木 基史 (SUZUKI, Motoshi)
京都大学・大学院法学研究科・教授
研究者番号: 00278780

中山 俊宏 (NAKAYAMA, Toshihiro)
慶應義塾大学・総合政策学部・教授
研究者番号: 60439560

(3) 連携研究者

該当なし